

生徒と教師の関わりが教師へのいじめの相談に及ぼす影響

元 笑 予 東京学芸大学連合大学院連合学校教育学研究科
坂 西 友 秀 埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座

キーワード：生徒と教師の関わり／いじめの相談／いじめの対象／いじめの体験時期

問題と目的

近年、いじめはますます深刻化しており、児童・生徒の自殺、不登校、非行など、様々な問題行動の原因の一つになっている。いじめは人権に関わる行為であるにもかかわらず、表面化しにくいことから周囲がいじめと認識しないまま、事態が進行してしまう危険がある。文部科学省(2014)によれば、平成25年度のいじめ認知件数は185,860件(小学校118,805件、中学校55,248件、高校11,039件、特別支援学校768件)であり、児童・生徒1千人当たりのいじめ認知件数は13.4件である。しかしながら、学校で把握できていないいじめも多数存在している。いじめ問題は依然として存在し、厳しい状態が続いている。

森田・清永(1994)は、教室のいじめを構成する要素として児童・生徒と教師をあげている。多くのいじめは学級内で起き、担任教師が深く関係していることが指摘されている。文部科学省(2014)の調査によると、いじめの発見のきっかけは「学級担任が発見」が12.8%で、いじめられた児童・生徒の相談状況は「学級担任に相談」が72.7%で最も多い。警察庁(2016)の調査によると、2016年の被害少年の相談状況をみると、相談した少年の内、保護者への相談は73.6%で最も多く、次いで教師に対して41.8%である。このように、いじめが発生した時に、児童・生徒は教師に相談する傾向が見られる。

教師—生徒関係の研究の中で、中井・庄司(2006)では教師—児童・生徒関係が学校教育の一つの基盤をなし、児童・生徒の学校適応などに影響を与えているとしている。生徒と教師の関わりは生徒の学校適応や人格形成にまで影響を及ぼすことが指摘されている(河野, 1988)。よって、生徒にとって信頼感や親和感を持つ先生がいる時に、児童・生徒は学校生活を楽しく感じる事が示唆される。生徒間に何らかのトラブルが発生したとき、教師に信頼を寄せている生徒は、事態が深刻化する前に先生に相談することができる。生徒同士の人間関係を良好にし、調整する上でも、生徒と教師の関わりが重要な役割を果たしていると考えられる。

永田(2011)は、生徒と教師が話すことによって、生徒の教師に対する抵抗感にどのように影響があるのかという調査を行った。その結果、教師の方から積極的に話しかけることが、生徒と教師の人間関係作りには重要なきっかけとなるとしている。教師と生徒が話すか否か(関わり・接触)は教師にとっては、生徒の状態を知り、教師には見えにくい彼らの人間関係に関する情報を得る手がかりの一つになると考えられる。生徒にとってみれば、教師との関わりが多いほど、困り事やトラブルについて教師に相談しやすくなると予想される。生徒と教師の関わりが多くなるほど、生徒は、いじめ場面に遭遇した時に、自分のことであれば他の生徒のことであれば教師に相談する傾向が強くなるであろう。

教師からの褒められた経験が生徒に与える影響について検討した研究が数多くある。青木

(2005) は、褒めることに関して心理学領域の研究を概観し、褒められる経験（言語的報酬）は生徒の動機づけを高めるとともに、自尊感情に対しても肯定的な影響を及ぼすことを示している。また、蓑輪・向井（2003）は小学生5、6年生を対象として、肯定的な褒め言葉を多く、否定的な言葉を少なく経験した児童は、自尊感情が高いことが明らかにしている。教師からよく褒められるということ（関わり・賞賛）は、両者の関わり・接触がより頻繁になることを意味することから、賞賛も前述のように生徒と教師の関わりが強さを表す指標の一つだと考える。さらに教師の肯定的な言葉かけに生徒の自尊感情を高める効果があるとするれば、生徒は萎縮することなく問題が起こった時に教師に相談することができるかと推測される。したがって、教師から頻繁に褒められる生徒は褒められない生徒よりもいじめにあった時に、教師への相談が多くなるであろう。しかしながら、教師から褒められる経験が、生徒のいじめの相談に及ぼす影響について検討した研究は見当たらない。

以上の考察をふまえ、本研究では、生徒と教師の関わり（接触と賞賛）に着目し、両者の関わり頻度が教師へのいじめの相談に及ぼす影響について明らかにする。

深谷・深谷（2003）は性差に着目し、大学生1,326名を対象に小中高時代に体験した「いじめ」についての質問紙調査を実施した。その結果、男子は女子より、いじめが発生した場合に、教師に相談することが多いことが明らかになっている。そこで、本研究では性差を焦点の一つとして検討する。また、いじめの体験時期と教師との関わりとの関連を明確にした研究は少ない。そこで本研究では、いじめ体験時期にも焦点をあて、高校生を対象とした質問紙調査をもとに、教師との関わりが教師へのいじめの相談にどのような影響を及ぼしているのか、いじめを体験した時期ごとに検討することとする。さらに、自分がいじめられる場合と友人がいじめられる場合で、教師への相談頻度に違いがあるかどうかを探索的に検討したい。これらに焦点をあて、生徒と教師との関わりが教師へのいじめの相談にどのような影響を及ぼしているのか、自分と友人のいじめとを分けて検討することとする。

以上から、本研究ではいじめが起きた時に、生徒と教師の関わりが教師への相談に影響を及ぼすという点について検証することを目的とする。仮説は以下である。

仮説1 教師との関わり（接触・賞賛）の多い生徒は、関わりの少ない生徒よりいじめが起こった時に教師への相談が多い。

仮説2 女子より男子は教師との関わりが多く、いじめが起きた時に教師に相談することが多い。

研究の実施に当たっては、現在の学校生活に望ましくない影響を与えるという調査実施上の問題を避けるため、いじめ当事者を直接調査対象とするのではなく、高校生全体を対象にして、回想法により実施する。なぜならば、過去を回想する高校生は今現在いじめの当事者ではなく、客観的に回答できる可能性があるからである。

方 法

調査時期 調査は2013年9月に実施した。

調査対象 埼玉県公立高等学校の2年生113名（男子55名、女子58名）であった。

質問紙の作成 学校生活の中での教師との会話の量と教師へのいじめの相談に関わる項目を作成した。調査内容は、主に二つの質問（教師との関わり・いじめによる教師への相談回数）から構

成した。

教師との関わり（接触・賞賛） 質問紙の前半では、自分が過ごした学校生活を思い出し、教師との接触頻度及び賞賛頻度を測定する質問項目を作成した。具体的には、「教師と気軽に話しをしましたか（話したことはありますか）」、「教師に褒められて嬉しかったことはどのくらいありましたか」の2項目である。この2項目について小学低学年・小学中学年・小学高学年・中学1年・中学3年の時を思い出して回答するよう求めた。質問項目への回答には「あてはまらない」から「あてはまる」の4点尺度を用いた。

いじめによる教師への相談回数 質問紙の後半では、自分と友人のいじめについて、小学・中学・高校ごとに教師への相談回数を調査した。具体的には、「いじめの問題で先生に相談したことがありますか」という項目である。「自分の場合」と「友人の場合」ごとに、小学・中学・高校別に、「全くない」、「1・2回ある」、「何回もある」の3点尺度を用いて、それぞれ尋ねた。

調査の実施 調査は、高校で授業時間の一部を使って集団実施した。調査開始前に無記名回答であること、答えたくない質問には答えなくてよいこと、あまり深く考えずに回答することを伝えた。また、調査に先立ち、この調査は一般的な傾向を明らかにするための調査であり、個人を取り上げた個別的分析は行わないことを説明した。その上で、可能な範囲で調査への協力を依頼した。なお、回答を拒否する者はいなかった。

結 果

仮説検証のためには、生徒が小学生・中学生の時に、教師とどの程度関わっているか（教師と話した機会の頻度および教師からの賞賛の多少）を調べ、頻度の低い群と高い群に分ける必要がある。また、教師との関わり（以下「接触・賞賛」）の頻度によって、自分と友人のいじめ問題を教師に相談した回数に差が見られるか検討する。

まず、回想時期の小学生の時の教師との関わり（接触・賞賛）の頻度が低い群と高い群の2群に分けた。群への分割に当たり、いじめの体験時期が小学低学年・中学年・高学年の全体（関わり（2・接触・賞賛）×学年数（3）の教師との接触と賞賛を見るために評定値を合計し、関わり（2）×学年数（3・低学年・中学年・高学年））を算出した。さらに評定値の合計を、この算出値の6で割り、教師との関わりの平均得点を求めた。教師との関わりの平均値を算出し、回答者の得点が平均値未満の生徒を「関わり低群」、平均値以上の生徒を「関わり高群」とした。なお、回想時期の中学生の時（中学1年と中学3年の合算）の教師との関わりの頻度による群分けも、同様の手続きで行った。

次に、人間関係の持ち方の男女差を考慮し、性、関わりの頻度を独立変数、小学教師・中学教師・高校教師に自分と友人のいじめに関して相談した回数を従属変数とした、経時的分散分析を行った。多重比較はシェッフエ法を用い、有意水準は5%に設定した。

小学生及び中学生の時に教師との関わりの高群、低群ごとに、小学・中学・高校時代の教師へのいじめの相談回数の平均と標準偏差をTable 1、2にまとめた。

最初に全般的な傾向を吟味した。教師へのいじめの相談回数の平均値を見ると、全体的に低く、いじめにあった時に、教師に相談しない傾向が見られた。しかしながら、友人より自分のいじめを教師に相談した回数の平均値はやや高かった。よって、自分がいじめにあった時に、友人の場合より教師に相談する傾向が見られた。また、自分のいじめであれ友人のいじめであれ、男子より

Table 1 小学生の時の教師との関わりの高低別の小学・中学・高校教師への相談回数の平均と標準偏差

小学生の時に教師へのいじめの相談回数	いじめ体験時期	教師との関わり									
		男子				女子				全体	
		低群		高群		低群		高群		平均	標準偏差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
I. 自分の場合	小学	1.30	0.66	1.33	0.72	1.26	0.63	1.69	0.75	1.35	0.68
	中学	1.35	0.59	1.27	0.59	1.39	0.72	1.54	0.78	1.38	0.67
	高校	1.05	0.22	1.13	0.52	1.19	0.60	1.15	0.38	1.14	0.47
II. 友人の場合	小学	1.09	0.29	1.27	0.59	1.26	0.58	1.57	0.85	1.27	0.59
	中学	1.14	0.35	1.27	0.59	1.26	0.58	1.36	0.63	1.24	0.53
	高校	1.14	0.35	1.27	0.59	1.06	0.25	1.29	0.61	1.16	0.43

Table 2 中学生の時の教師との関わりの高低別の中学・高校教師への相談回数の平均と標準偏差

中学生の時に教師へのいじめの相談回数	いじめ体験時期	教師との関わり									
		男子				女子				全体	
		低群		高群		低群		高群		平均	標準偏差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
I. 自分の場合	中学	1.25	0.44	1.40	0.74	1.38	0.65	1.52	0.81	1.39	0.67
	高校	1.00	0.00	1.20	0.56	1.17	0.56	1.19	0.51	1.14	0.47
II. 友人の場合	中学	1.09	0.29	1.33	0.62	1.21	0.41	1.41	0.73	1.25	0.54
	高校	1.18	0.39	1.20	0.56	1.04	0.20	1.23	0.53	1.16	0.43

女子の方が教師への相談回数の平均値は高かった。したがって、いじめにあった時に、男子より女子の方がいじめを教師に相談する傾向が見られた。

I 自分の場合

1. 小学生の時

分散分析（関わり頻度、性を独立変数、相談頻度を従属変数とした）の結果、教師との関わり頻度、性の主効果及び交互作用とも有意ではなかったが、いじめの体験時期（3水準）の主効果が有意であった（ $F(2, 150)=8.04, p<.001$ ）（Figure 1）。小学、中学、高校の順に自分のいじめを教師へ相談した回数が少なくなる傾向が見られ、高校生になると相談回数は急激に減少した。高校生はいじめの相談を教師にしなくなる傾向が見られた。教師へのいじめの相談回数に影響するものにはいじめの体験時期があることが示唆された。性差については、男女に関係なく、いじめがあったときに、教師へ相談する傾向が見られた。

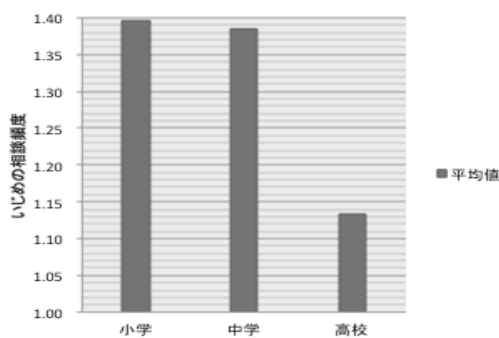


Figure 1 小学生の時に自分のいじめを教師に相談した回数

2. 中学生の時

同様の分散分析の結果、教師との関わりの頻度、性の主効果及び交互作用とも有意ではなかったが、いじめ体験時期（2水準）の主効果が有意であった ($F(1, 76) = 17.47, p < .01$) (Figure 2)。よって、中学、高校の順に自分のいじめを教師へ相談した回数が少なくなっていた。教師へのいじめの相談回数に影響するものにはいじめの体験時期があることが示唆された。性差については男女に関係なく、いじめがあったときに、教師へ相談する傾向が見られた。

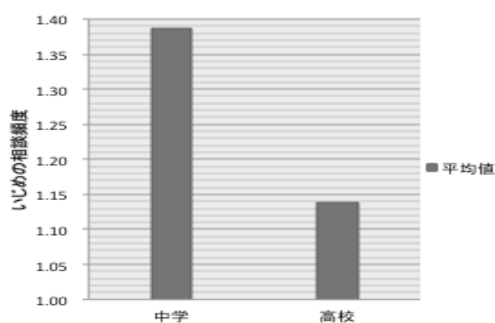


Figure 2 中学生の時に自分のいじめを教師に相談した回数

II 友人の場合

1. 小学生の時

分散分析の結果、いずれの主効果、交互作用とも有意ではなかった。

2. 中学生の時

分散分析の結果、いずれの主効果、交互作用とも有意ではなかった。

考 察

本研究では、回想時期の小学生及び中学生の時に、生徒の教師との関わり（接触と賞賛）の頻度によって、彼らが自分及び友人のいじめに遭遇した際に、教師に相談する傾向に違いが生じると予想し、検証を試みた。その結果、生徒と教師の関わりと教師へのいじめの相談の多さには直接的な関連は見られなかった。しかしながら、教師へのいじめの相談には、性差・いじめの対象・いじめの体験時期が影響すると推測できる。

教師との関わり

本研究では、教師と生徒の関わりと教師へのいじめに関する生徒の相談の多さとの関係については明確にできなかったが、いじめ問題の解決において児童・生徒と教師の関係性は非常に重要だと考えられる。なぜならば、学校でのいじめ発生時に一番近くにいる大人は教師であり、生徒と教師の関わりがいじめに変化をもたらしやすいことが示されてきたからである（岡安ら、1993）。山本（2009）は教育者として数多くの子どものたちと関わった経験から、「話しかける・褒めること」によって、子どもの発達や能力の育成を促すことを確信したと述べている。話かけるこ

と・褒めることは、教師にとって特殊な能力も道具も必要とせず、誰にでもできることである。三島・宇野（2004）の研究では、教師による「受容・親近な態度」が学級雰囲気大きく影響していることが示された。秦（1994）の調査では、いじめがよくあるという学級では、担任教師が話を聞いてくれるという生徒の割合が少ないことが明らかになっている。教師が「ネガティブな関わり」をすると、生徒は教師との会話や関わるの機会を失い、信頼関係は築くことができない。また、教師が消極的な関わりしかせず、学級と接する時間が少ないといじめに気づく機会も失われ、いじめの発見が遅れることにもつながる。これらの研究は、教師対個々の生徒の関係と同時に、学級という集団の力を考慮した学級運営の重要性を指摘している。集団的な人間関係を全体的に調整する力が教師には求められているのである。したがって、本研究の結果は絶対的にとはいえないが、生徒と教師の関わりがいじめの相談の解決手段の一つになりうることを示しているといえるだろう。

性差について

本研究の結果では、男子に比べて女子の方が、教師への関わりが多いほど、自分と友人のいじめを教師に相談する傾向が見られたが、有意ではなかった。今回の結果からは、いじめの体験時期ごとの性差について明確にはできないが、男女の発達の特徴が関係しているように思える。教師との関わりが重要な時期に教師にいじめの相談することは、発達上の男女の性の特徴も絡んでいることが考えられ、今後検討すべき課題である。

いじめの体験時期といじめの対象について

本研究の結果では、自分のいじめを教師に相談した時期については、学年が上がるにつれ教師に相談する傾向が見られなくなっていた。さらに、友人のいじめと比べて、自分がいじめにあった時に、教師に相談する傾向が見られた。

今日のいじめは、大人社会の反映であるといわれて久しい。社会の複雑さや核家族化、少子化などは家族機能を変化させ、さらに受験戦争や格差社会は、社会全体の関係性の希薄化や個人主義傾向を生み出した。親から自立していく過程で児童期・青春期・青年期の対人関係は重要な意味を持つと考えられる。その時期のいじめ体験は、青年期前期の適応状態とも関連してくることが予想される。

本研究の結果から示唆されるいじめ対策

いじめは教師の前で堂々で行われることは稀であり、日常的な観察による発見は容易ではない（大西，2007）。森田ら（1999）によれば、担任教師にいじめ被害を訴える生徒は中学生で3割前後であった。いじめを容認する教師ほど、生徒たちは教師を信頼せず、いじめに無関心な教師ほど、いじめ被害者は教師に助けを求めている（渡部ら，2001）。

河村（2011）は、いじめを受けている子どもたちを、担任の教師が配慮を必要とする子どもと捉えていたか調査した結果、実際にいじめを受けている子どものうち、小学校で46.2%、中学校で33.3%は、担任の教師から完全に見過ごされていたことを指摘している。これらの調査から、教師と児童・生徒の人間関係が親密であり良好であるほど、いじめ発生時に子どもは教師に相談し、連絡することが多くなると推測できる。

栗原（2007）は、いじめの早期発見と早期対応を促す教師のあり方として、教師が子どもに信

頼されるとともに、教師の意識を変えることが必要であると指摘している。すなわち、いじめがないことを前提に生徒たちに接するのではなく、いじめが存在する可能性を前提に接することで、いじめの早期の発見と的確な対応が可能になることである。教師が、いじめ問題をどのように把握するか、教室全体にいじめ防止、抑止に結び付く雰囲気をもどくように作り出すのかなどが重要な課題になる。本研究を通して、子どものいじめを防止し、さらに、子どもの教育を改善するためには、従来から指摘されてきた通り、教師と生徒の人間関係を良好にし、信頼関係を築くために力を尽くすことが教師に求められているといえる。

本研究の限界と今後の課題

まず、本研究の限界について言及する。本研究では約100名の高校生を対象としたが、サンプル数が十分ではない可能性がある。よって、今後、調査人数を増やし、一定の地域だけではなく、他の地域でも調査を実施する必要がある。

また、いじめはいじめっ子といじめられっ子の単純な人間関係だけで発生するものではない。その背景に多くの社会文化的・経済的な要因が絡みあって生じる。性別、家族構成、家庭の経済状況、本人の学業成績などといった要素がいじめと関連すると考えられている。また、SNSの普及と共に、ネットいじめ問題が次第に深刻化しつつある。今後は、教師との関係だけではなく、傍観者の立場から研究を深め、教育を通じて、生徒のITテラシーを育成することが必須課題となる。個人所有の通信媒体・機器のもつ利便性と危険性について生徒に理解を促し、健康的で健全に使いこなす力を身につけられるように支援する必要がある。このことが、傍観者のいじめへの抑制的な介入を促進し、傍観者を援助者に変えるための重要な必要条件の一つになるであろう。

引用文献

- 青木直子 (2005) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 52, 123-133.
- 大西彩子 (2007) 中学校のいじめに対する学級規範が加害者に及ぼす効果 カウンセリング研究, 40, 199-207.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993) 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 河野義章 (1988) 教師の親和的手がかりが子どもの学習に及ぼす効果 教育心理学研究, 36, 161-165.
- 河村茂雄 (2011) 生徒指導・進路指導の理論と実際 (第9章) 図書文化
- 警察庁生活安全局少年課 (2016) 少年非行情勢 (平成27年) 2015年8月27日 <https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hikoujousei/H27kami.pdf>
- 栗原真二 (2007) いじめの早期発見と早期対応のために：学校教育相談の立場から 臨床心理学, 7, 447-453.
- 中井大介・庄司一子 (2006) 中学校の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究, 54, 453-463.
- 永田孝夫 (2011) 高校教師の力量についての考察—教師と生徒の人間関係作りと教師との協働— 愛知大学教職課程研究年報, 創刊号, 47.
- 蓑輪早織・向井隆代 (2003) 叱り言葉・ほめ言葉と親子関係認知, 子どもの心理的適応との関係 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 313.
- 森田洋司・清永賢二 (1994) 新訂版 いじめ 教室の病 金子書房
- 森田洋司・滝充・秦政春・星野周弘・若井善蔵 (1999) 「日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集」 金子書房

- 文部科学省（2014）平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について
平成26年10月16日（木）文部科学省初等中等教育局児童生徒課
- 三島美砂・宇野宏幸（2004）学級雰囲気によらず教師の影響力 教育心理学研究, 52, 414-425.
- 秦政春（1999）いじめ問題と教師—いじめ問題に関して調査研究（Ⅱ）—大阪大学人間科学部紀要 25,
237-258.
- 深谷昌志・深谷和子（2003）『いじめ』の残したもの, モノグラフ・小学生ナウVOL.23-2, ベネッセ未
来教育センター
- 山本千紗子（2009）乳幼児に話しかけること・褒めることの大切さ：子育て支援のためのエビデンスを求
めて 上武大学看護学紀要, 5(1), 19-25.
- 渡部瑞恵・東海林則子・椿堂由紀（2001）心理カウンセラーを志望する大学生のパーソナリティ特性の検
討—援助規範意識との関連から— 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, 6, 1523.

(2016年9月30日提出)

(2016年12月15日受理)

The Frequency of a student's bullying consultations' effect to the Student-Teacher Relationship

Xiaoyu YUAN

The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University

Tomohide BANZAI

Psychology and Education Practice

Abstract

In this study, we focused on the involvement of students and teachers (praise contact), where- in both the impact on the consultation of the teacher when bullying occurs and the terms are con- sidered the purpose. For this study, 113 High School Sophomores, 55 of which are men, and 58 are women were surveyed using a questionnaire through reminiscence. In the time of recollection, for elementary and junior high school students, we try to verify the difference that occurs in their ten- dency to consult their teachers depending on the frequency of the student's teacher's involvement when the student's and their friends encounter bullying. The Survey content was mainly composed of two questions (the involvement of the teacher • number of times of consultation to teacher when bullying occurs). As a result, a direct link was not seen in the involvement between the teacher and the student during the consultation when bullying occurs. However, in the consultation to the teacher when bullying occurs, it can be assumed that gender • the target of bullying • the target time of bullying is affected. Therefore, from the results of this study, there was no absolute impact on the relationship between the teacher and the student during consultation but it is one of the means to solve the bullying problems.

Keyword: Students and Teacher Relationship / bullying consultation / experience time of bullying